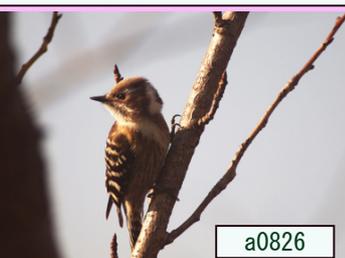


いのち
生命のにぎわい通信

第28号：発行 平成25年(2013年)11月

秋から冬の落葉した樹林では「カラ類の混群」が観察できます

木の葉が落ちた明るい樹林では、複数種の鳥が「混群」を作り、一緒に行動します。混群により、協力して天敵を「早期発見」したり、エサを探しやすくなります。小さな鳴き声とパラパラと羽音が聞こえたら、樹林の枝を見上げてみましょう。種を見分けて、それぞれの行動の特徴を比べながら観察してみてください。

<p>シジュウカラ (シジュウカラ科)</p>  <p>a0708</p>	<p>ヤマガラ (シジュウカラ科)</p>  <p>a0728</p>	<p>ヒガラ (シジュウカラ科)</p>  <p>a0261</p>	<p>エナガ (エナガ科)</p>  <p>a0285</p>
<p>「ツツピー、ツツピー」と頻りに鳴くため、声をたよりに探す事ができる。好奇心が旺盛で、観察している人間の様子をうかがいながら、頭上の枝まで近づいてくる。喉から腹にかけての黒いネクタイがトレードマークである。混群の中心的存在で、移動の時も群れの中間にいる。</p>	<p>「ニーニー」と小さな甘えた声で鳴く。好奇心が非常に強く、人間の様子を伺いながら、手の届きそうな距離に降りてくる事もある。シジュウカラよりはゆっくり移動していく。オレンジ色のお腹と明るい灰色の組み合わせがきれいであり、顔の白色が良く目立つ。</p>	<p>「ツピー、ツピン」とシジュウカラよりも高い声で鳴く。メジロくらいの大きさでせわしなく動くので観察が難しい。例年は観察数は少なかったが、2012年10月～2013年3月は非常に多く観察された。翼にある二本の白線が目立つ。ネクタイはどの蝶ネクタイである。</p>	<p>「ビビ、ツピン」とせわしなく鳴く。餌探しに夢中になっている時は観察しやすい。混群が移動を始めると群れの先頭になり、すばやく通り過ぎてしまうため、鳴き声でしか確認できない時がある。特徴は、白い羽色に背中中のブドウ色と短い嘴、体に比べて長い尾羽である。</p>
<p>キクイタダキ (キクイタダキ科)</p>  <p>a0782</p>	<p>メジロ (メジロ科)</p>  <p>a0512</p>	<p>ウグイス (ウグイス科)</p>  <p>a0284</p>	<p>コゲラ (キツツキ科)</p>  <p>a0826</p>
<p>「ツイツイ、チー」と細い声で鳴くため、注意していないと聞き逃す。日本産鳥類で最小の鳥である。動きが非常に早く、針葉樹などの枝先をせわしなく動き回るため、名前の由来である頭頂部の黄色い菊の頂きは観察しづらい。年により観察数に変動し、2012年10月～2013年3月は多く観察された。</p>	<p>「チィチィ、チュル」と甘い声で良く鳴く。緑色の体と眼の周りの白い輪が良く見える。観察時には突然目の前に出て来る時がある。果物や花の蜜が大好きで、冬には樹液を吸う姿も観察できる。「ウメにウグイス」や「ウグイス色」は、メジロとウグイスを取り違えていて、メジロの緑色の羽色をいう。</p>	<p>「チャッ、チャッ」と地鳴きしながら、藪や植え込みの中を移動するため、姿の観察は難しい。冬季は高い枝にはほとんど出ない。やや緑がかった褐色で目立たない。春先のさえずり「ホーホケキョ」は有名で、平安時代から「オオルリ」「コマドリ」とともに、さえずりの美しい「日本三鳴鳥」と呼ばれる。</p>	<p>「ギー、ギー」と小さく鳴きながら枝から枝へ移動する。日本産キツツキ類では最小の鳥である。市街地の公園などでも見られる。樹の幹に貼り付くように停まり、つついて虫を食べる。見分けは背中中の灰褐色と白の縞模様である。混群の後ろに少数がいて、群れについて行く。</p>

団員から報告に添付された写真のうち、同定の難しい写真は千葉県立中央博物館に送られて専門家が鑑定しています。

多くの写真は名前（種）が判明するのですが、どうしてもわからずに、種名不明となる写真もあります。もう少し鮮明に写っていれば、この種の見分け部分が写っていればわかるのに・・・という場合が多いので、「名前がわかる写真の撮り方のコツ」をまとめてみました。

○コツその1・・・昆虫は図鑑と同じ方向から撮る

昆虫は種類により、名前調べでチェックすべき場所が違います。例えばバッタでは、横から見たときに、側面の模様、尾部の形など、チェックすべき項目がよく見えるので、図鑑では真横からの絵や写真が使われます。



翅、脚、体型がよく見える
クルマバッタモドキ
(a0034)

○コツその2・・・植物では、部品を分けて、そして全体を撮る。

植物では、花の部分のみの写真が多いようですが、花だけでは判断できない場合が多いのです。葉、花、実、葉の茎への付け根などの部分ごとの写真と植物の株全体の写真が組み合わせると、名前の調べやすさが向上します。

右の写真は**特定外来生物**の

オオカワヂシャです。

同じ株の各部分の写真です。

(a0544)



○コツその3・・・大きさ／サイズがわかるように撮る

図鑑には「体長2cm」「花の直径25～30mm」と大きさが記されています。しかし、写真では、大きさがわかりません。一番良い方法は、撮影の最後に定規を添えて、生きもののサイズを測った写真を撮影することです。定規が無い場合は、1円玉でも手のひらでもかまいません。動く昆虫などの場合は、飛び去った後に、昆虫が止まった葉に定規を添えて撮っても十分です。



定規を当てると大きさが良く分かる
ハクレン稚魚
(a0418)

○コツその4・・・ピント（焦点）の合った写真を撮る。

初心者が多いのが、小さな生物を大きく写すためにズーム機能で撮ってしまうことです。ほとんどのデジタルカメラは望遠側では近くにピントが合いません。広角側にしたまま、遠くから1枚、少し近寄ってまた1枚、という様に撮影しましょう。小さな花や虫は、背景にピントが合ってしまうので、生物を手のひらに載せて撮影すると、ピントが掌に合うので、写真が撮れます。



被写体がぼやけている
アオマツムシ
(多様性センター)

○全体として

一枚の写真にその生物の全ての特徴を写し込むのは不可能です。昆虫でも植物でも、色々な角度と距離から、多くの写真を撮りましょう。種の見分けポイントをしっかりと撮りましょう。

平成26年夏に県立中央博物館では「図鑑展」を開催します

千葉県立中央博物館では、平成26年7月中旬から10月中旬に「図鑑の企画展」を開催する予定です。植物図鑑、昆虫図鑑、野鳥図鑑、魚、貝、両生爬虫類など、生き物の図鑑をたくさんご紹介いたします。講座や観察会も多く企画しています。図鑑等の掲載写真を撮影している写真家に直接に指導いただける機会も企画したいと思います。ご期待下さい。

ミサゴとチョウゲンボウ

開けた環境に生息していて、観察することが比較的容易な猛禽類の2種



「ミサゴ（タカ目ミサゴ科）」

日本鳥学会の日本鳥類目録の改訂第7版では、タカ科からミサゴ1種がミサゴ科として独立した。県内では、海岸、手賀沼や印旛沼、河川・河口などで見られるが、本種の繁殖は確認されていない。冬季は個体数が増えてくる。水域の上空からダイビングして足で魚を捕らえる。(a0285)

千葉県 RDB B 重要保護生物



「チョウゲンボウ

(ハヤブサ目ハヤブサ科)」

日本鳥類目録の改訂で、タカ科とハヤブサ科は類縁が遠いと判明し、タカ目からハヤブサ目が独立した。本種は県内でも繁殖しており、市街地でも小鳥を追う姿が見られる。河川敷や農耕地では電信柱や橋周辺に停まっている。(a0284)

千葉県 RDB D 一般保護生物

＜これからの季節に観察できる生きもの＞

◎ (a0**) は写真撮影者の調査団員番号

○調査対象種: ミヤコドリ、モズのはやにえ、ミノムシ類、

◎千葉県 RDB (レッドデータブック) は、保護上重要な野生生物をとりまとめた本。

○調査対象種以外 (同定が難しいため、報告には写真の添付が必要です)

* 渡り鳥のカモ類、猛禽類 など * 越冬している昆虫: タテハチョウ類、 など

* 希少生物 (生息・生育数が減少している生物) や外来生物 (特定外来生物・要注意外来生物) の報告も受けています。